

再びお願い「百人一首を車内にも貼って！」

昨年に引き続き、1月の朝日新聞「天声人語」で取り上げられた「現代学生百人一首」です。東洋大学が全国から募り、6万3千首も寄せられたといひます。私は「この百人一首を電車内にも貼ってください」と今年も同紙の声欄に投稿しました。でも原稿そのものが拙劣だったのか、スポンサーが難しいなどの背景があったのか、掲載にはなりませんでした。でもその思いはやみがたく、このホームページで再び発信した次第です。共感の方、アドバイスをいただければ幸甚です。以下は句への私自身の感想です。

#

<染みついた鉄のにおいがする髪をとかして思うもはや職人>楽しかった高校生活から社会の最前線へ。「鉄のにおい」「髪」「職人」といった言葉の中に、実社会に出たばかりでたくましくも奮闘する乙女の繊細な心と自覚が伝わってくる。<幼き日遊び場だった畑作地今では父と僕との職場>こちらは農作業に従事し始めた若者だ。筆者も子供のころ、信州の収穫後の畑で兄とキャッチボールやボール蹴りに興じたものだった。句では父の手ほどきを受けながら将来を担おうとする息子の心意気が、幼き日の郷愁を乗り越えていく。

<君の名の・・・>も<こんなにも・・・>解説なしに、淡い青春の胸キュンが切ないほどに響いてくる。<駆け抜ける・・・>では「いらぬものが削ぎ落とされる」で強く言い切った。鋭く前に向かう気合が入っている。

<平然と・・・>「汚れているのは米か心か」まだ汚れを知らない正義感からの叫びである。<日本にも・・・>さっそうと就任したオバマ大統領とアメリカ市民の熱気。無理とはわかりながらも、「日本もこうあればなあ!」。高校生でなくても誰もが抱く願望だろう。

天声人語

「染みついた鉄のにおいがする髪をとかして思うもはや職人」。青森県の工業高校3年の女生徒、荒谷夏希さんの詠んだ歌だ。北海道の農業高校3年、田守健太郎君は「幼き日遊び場だった畑作地今では父と僕との職場」とうたう▼毎年この季節、東洋大学から届く「現代学生百人一首」を楽しみにしている。急ぎ足で過ぎる青春の日々を、虫ピンで留めたような言葉の数々。22回目の今年も全国から6万3千首が寄せられた▼入選作のテーマは様々だが、何と言っても人を恋う年頃だ。「君の名の漢字を辞書で引いてみる心のしおりそうつとはさむ」高2、宮下唯。「こんなにもキレイにノートをとるのはね君に『貸して』と言われたいから」高2、榎原香菜▼そんな胸に、孤独や憂いのさざなみも立つ。「生も死も書けば一文字十五夜のすすきの中にもぼつんとひとり」高1、安藤弘理。「見つけたらいけない気がする何故だろう青い色した幸福の鳥」高3、鎌田美紅▼でも頑張る。「駆け抜ける百メートルをおもいきりいらないものが削ぎ落とされる」中3、鈴木花音。「限界は僕が思うほど近くないぶつかるとまでは走ってみようか」高1、村崎愛奈。女の子の使う「僕」が意外と爽快に響く▼大人に言いたいことだつてある。「平然と使われ続けた汚染米汚れているのは米か心か」高3、合田佳祐。そして政治家にも。「日本にもオバマ旋風巻き起これみんな待ってる頼れる総理」高1、松村かおり。Yes We Can。希望の灯る世の中を未来の有権者も待っている。